

# 平成 28 年台風 10 号災害緊急調査報告会 開催案内

平成 28 年 8 月 30 日に岩手県に上陸した台風 10 号は、岩手県や北海道に甚大な被害をもたらしました。特に岩手県内では、死者 20 名、行方不明者 3 名に及び、孤立世帯も一時、535 世帯 1,093 名に達するなど、近年では類を見ないほど大きな災害になってしまいました。

岩手大学では、発災直後から地域防災研究センター所属の教員らにより水害や土砂災害などを精力的に調査してまいりました。それらの調査結果の概要を報告し、今後の防災活動に資することを目的に、下記の緊急調査報告会を開催致します。是非ご参加くださいますようお願い申し上げます。

開催日時 2016 年 10 月 15 日 (土) 16:00~18:50 (開場 15:30)  
開催場所 岩手大学理工学部キャンパス内 復興祈念銀河ホール (定員 120 名)  
対 象 一般市民, 自然災害研究者, 防災関係者, 行政関係者, 教育関係者, 学生等 (どなたでも)  
入 場 料 無料 ※事前申込不要です

## プログラム

	総合司会	越谷 信 (地域防災研究センター, 理工学部教授)
16:00	開会あいさつ	岩淵 明 (岩手大学学長)
16:10	「地域防災研究センターの取り組み」	南 正昭 (地域防災研究センター長, 理工学部教授)
16:20	「台風 10 号による岩手県の被害概要および小本川の水害調査報告」	小笠原敏記 (地域防災研究センター, 理工学部准教授)
16:45	「台風 10 号による久慈川水系を中心とした流木被害」	松林由里子 (地域防災研究センター, 理工学部助教)
17:10	「台風 10 号による土石流の調査」	大河原正文 (地域防災研究センター, 理工学部准教授)
17:35	休 憩	
17:45	「台風 10 号による岩泉町及び宮古市における土砂災害の実態調査」	井良沢道也 (地域防災研究センター, 農学部教授)
18:10	「台風 10 号による岩泉町の被災状況と今後の課題」	広田 純一 (地域防災研究センター, 農学部教授)
18:35	質疑応答	
18:50	閉会	

※ 理工学部の駐車場が利用できますが、当日は混雑が予想されます。なるべく公共交通機関をご利用ください。

主 催 岩手大学 (岩手大学地域防災研究センター)

お問い合わせ先



岩手大学地域防災研究センター

〒020-8551 岩手県盛岡市上田4-3-5

Tel: 019-621-6843 (Fax 兼用)

Email: yoshihir@iwate-u.ac.jp



# 融雪で土砂災害の恐れ

## 台風10号 砂防学会が現地調査

台風10号による豪雨で不安定な状態となった土砂が山中の沢などに残り、冬季の融雪で土砂災害が発生する恐れのあることが、砂防学会東北支部の現地調査で分かった。被災地の山中には未調査の沢が多数あり、降雪期に入る前に上空や地上からの状況確認が必要だと指摘している。



岩手町の小本川の河床には大量の土砂堆積が確認された（井良沢教授提供）

岩手大学で15日に開かれた豪雨災害の調査報告会で、砂防学会東北支部の調査団の委員長を務めた井良沢道也岩手大農学部教授が報告した。調査団は9月9、10日に岩泉町と宮古市に入り、被災の状況を調べた。

国土交通省の今月8日時点のまとめでは、県内では土砂災害が約150カ所

確認されている。井良沢教授によると、土砂災害の大半は集落の付近や生活圏で発生して住民が通報したもので、これ以外に多数の土砂災害が起きている可能性が高いという。

井良沢教授は、大量の降雨により沢に堆積した土砂が不安定な状態になっていると推測され、今後、雪解けて土砂災害を引き起こす可能性がある」と指摘する。初冬でも、根雪になる前に気温上昇で融雪が起きる恐れもあるという。「不安定な土砂の堆積が確認された沢の下流に集落がある場合、土砂の流出を検知するセンサーの設置を検討すべきだ」と話す。

現地調査では、河川の底に堆積した大量の土砂が確認できた。場所によっては1〜2メートル程度の堆積が見られたという。「目視でも分かるほど川底が上がっている場所があった。これまでより少ない雨量で河川の氾

濫が発生する可能性も考えられる。今後、降雨時には河川の水位を注意深く監視する必要がある」と注意を呼びかける。

被災地では、大規模な山林の崩壊は、井良沢教授が

想定していたより少なかった。「流出した土砂は相当な量だった。河川の底に堆積したものや、河岸が崩れたことで発生したものが多かったのではないかとみ

（角津栄一）

平成28年10月16日 朝日新聞岩手版



台風10号豪雨

# 危険度評価法見直しを

## 岩手大 岩泉の河川など調査

台風10号豪雨で被災した岩手県岩泉町などの洪水被害や土砂災害を調査した岩手大地域防災研究センターの報告会が15日、同大であり、被害が拡大した要因などを発表した。

理工学部の小笠原敏記准

教授（水工学）は、岩泉町の高齢者グループホーム「楽ん楽ん」で入所者9人が犠牲になるなど洪水被害が深刻だった小本川流域を調査した。

被害が甚大だったと指摘。「河川の危険度の評価方法を見直すべきだ。上流、下流の特性や流域にどんな施設があるかなどを考慮し、場所ごとに危険性を判断する必要がある」と語った。

同部の大河原文准教授

被害が甚大になった要因を示した岩手大の調査報告会



（地盤工学）は、岩泉町内で土砂崩れや土石流が1392カ所で発生したと報

告。沢や川に堆積した土砂を分析した結果、「道路整備の際の基礎部分に適している。道路建設に再利用できる」と指摘した。

農学部の井良沢道也教授（砂防学）は岩泉町と宮古市で土砂崩れ現場を調査した。土砂災害が起きた沢の流域の樹木には大きな損壊がなく土砂の粒は小さいことから、「土石流の中でも流れの速度が比較的緩やかな土砂流が発生した」と推測した。